

## 大畠 襄 Nozomu O'HATA

<主な掲額理由> サッカー界においてスポーツ医学分野の発展に貢献。FIFAの医事委員等を歴任

### ●1930年11月25日、東京都生まれ

旧制成城高等学校尋常科でサッカーを始め、成城高等学校及び東京慈恵会医科大学でプレー。

同大整形外科、形成外科学教室を経て1984年教授。

翌年同大健康医学センターに、日本の医科系大学では初のスポーツ外来部を設立し、93年同センター長・スポーツ医科学教授に就任。

96年より東京慈恵会医科大学客員教授。

1964年JFAにおいて医事活動をスタート、70年第6回アジア競技大会で日本代表初のチームドクターをつとめ、以後約10年間日本代表チームに帯同、医学をスポーツの現場にフィードバックする体制を築いた。71年には三菱重工サッカー部で日本初のチームドクターとなり、74年にJSLチームドクター協議会を設立。77年JFAスポーツ医学委員長(～98年)となり、サッカー医・科学研究会、サッカードクターセミナーを発足させ、95年にはJリーグにドーピングコントロールを導入等、医学管理の重要性を日本サッカー界に浸透させた。また、96年CAFと共催してプレトリア(南アフリカ)でスポーツ医学セミナーを開催し、ワールドカップ日本招致に貢献した。

1982～06年FIFAスポーツ医学委員会委員、83～02年AFC医事委員長(医事委員就任は79年)として、FIFAワールドカップ(90年イタリア大会から5大会連続)、アジアカップ等国際大会における医学管理とドーピングコントロールの指揮をとった。06年引退に際し、FIFA功績認定証が授与された。また、95年第1回アジア・科学とフットボール学会(東京)を皮切りに、アジア各地でスポーツ医学会議、スポーツ医学セミナーを開き、アジアのスポーツ医学の普及と向上に貢献、「アジアスポーツ医学の父」と称される。92年、02年AFC功労賞受賞。





2002FIFAワールドカップ  
イングランド対アルゼンチン戦の  
試合前の様子



2006FIFAワールドカップ(左は、Dr.Michel D 'HOOGHEと)

